

---

# 最遊記～三蔵一行が地上を旅する理由～

畔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最遊記〜三蔵一行が地上を旅する理由〜

### 【Nコード】

N4785BA

### 【作者名】

畔

### 【あらすじ】

タイトルのまんまです。拙い文章ですが、よろしくお願いします。

暗い。どーしてこんなに暗いのかな

悟空はため息をついた。

空はどす黒く、光のカケラさえ見えない。

「どーしてこんなトコにいるんだろ・・・」

手を伸ばしても届かない自由。

「俺、ずっとこのままなのかな」

その時、一点の光が見えた。

「何してんだ、こんなトコロで」

「え・・・？」

その人が悟空に手を差し伸べるとカシヤン・・・と、手錠が外れた。

「外れた・・・？　ずっと取れなかったのに」

三蔵は檻の中でぼうつとしている悟空を見て、不機嫌そうに言った。

「出ないのか？　せつかく自由になれたのによ」

すると悟空ははっとした様子で有を見た。

「あつアンタさ、どーやってコレ取ったの？　ずっとやってたけど俺、取れなかったのに」

三蔵は悟空が再び手に持った手錠に触れた。

「俺の名前は玄装三蔵。長く言つと第三十一代目東亜、玄装三蔵法師だ」

「ふーん・・・。じゃあつ、『サンゾー』でいい？！」

その時、ドサツと何かが落ちて来た。

「なつ・・・。何だつ、お前？！」

檻から出てきた悟空が叫ぶ。

「あつあの・・・」

「え？」

落ちて来たのは白髪はくまつの少女だった。

「?????!」

少女は足を押さえる。すると、三蔵が近寄った。

「怪我をしているな」

「ひ・・・」

少女は怯えきっていた。

「どうしたんだよ、こいつ」

悟空が不思議そうに少女を見た。続いて三蔵を見やる。悟空は驚きに目を見開いた。

「え？ 三蔵?!」

悟空は三蔵が持つ銀の銃に目が釘付けになる。

どうして？ 何で？ 悟空の頭には、その二つの言葉しか浮かんでこない。

「悟空、騙されるな」

三蔵は少女に向けて銃を発砲した。

「どつ・・・どうして？ どうして攻撃したの、お兄ちゃん」

少女は後ずさりする。すると、三蔵は悟空にでも分かるようにゆっくりと説明し始めた。

「こいつの名は鬼姫。れっきとした『妖怪』だ」

鬼姫は生まれた時から白髪しろがみや顔にしわを作った女の鬼。人間や自分以外の妖怪の『エネルギー』を吸う事で若返る事が出来る特種な妖怪。

「ンじゃあ俺達、狙われてるってコト？」

「そういう事だな」

冷静になってきた（元から冷静だが）三蔵とは裏腹に、悟空は心底わくわくしてきた。

初めて『敵』って奴と戦うじゃん！ 何かスツゲえ・・・楽しそうっ！

「うおりゃあああっ!!」

悟空は鬼姫に向かって行った。すると、鬼姫は冷笑した。正体を

現したと言つても過言ではない。

「????つわ!」

攻撃を跳ね返され、悟空は一步下がる。

「たわいも無いわ、こんな弱い技など。もう少し強い技でかかってこい」

三蔵は大げさにため息をついた。これからの苦勞を思つて。

「やはり、檻の中に居た時のダメージがまだ残ってるな・・・。

悟空っ、下がれ! 俺が !」

三蔵ははつとした。悟空は三蔵を後ろに下がらせ、敵を挑発していたのだ。

「こいよ、鬼姫。俺をなめんなよ?!」

再び悟空は鬼姫に向かつて行つた。

一つの影。

「はあ・・・暇ですねえ」

「オイオイ、爺むさく茶すすってんなよ八戒」

もう一つの、影があつた。

「おや? 僕以外にお茶をすすっているのはどこの誰でしたっけ?」

八戒は目を閉じた。それでもまだ、太陽の光は薄く見える。

「ハイハイ。俺ですよっ!」

悟浄はバツと立ち上がった。

「そうですね、でも貴方の生活態度は改めた方がいいですよ」

八戒はにつこりと笑った。

「おまつ・・・変わってねーなア、昔っから」

悟浄はため息をついた。

「あ、そうだ」

そんな悟浄の気持ちを見事にスルーし、八戒は何かを思い出したかのように立ち上がった。

「どした？ 八戒」

「三蔵に、『早く来い』って言われていたのを忘れていたんです。どーしましょうかねえ」

八戒は半ばあきらめた様子だった。

「『どーしましょうかねえ』じゃねーだろ。三蔵爺サマは自分<sup>テメー</sup>は時間を余裕で守らないクセして他人の事はすっげえ五月蠅いんだぜ？」

すると八戒はぼかんとした感じで、「悠長に言ってますけど悟浄、貴方も同じ事を言われたハズですけど」と言った。

「ま、遅刻者同士それこそそのんびり行こうぜ？」

「そおですね」

「遅え・・・！」

三蔵はカラになった煙草の箱を握りつぶした。

「遅いって、八戒達が？」

悟空はヒヤヒヤしながら三蔵に訪ねる。いつ、『うるせえっ、このバカ猿っ！！』とハリセンで頭を殴られるか分からなかったか

らだ。しかし、悟空が予想していた展開にはならなかった。

「あいつらの案路なんざどうでもいいんだよ。それより、俺が遅  
いっつったのは三仏神からの命だ」

「三仏神からの命？」

悟空は三蔵が答えた事をそのまま尋ねた。

「ああ。俺は早く『聖天経文』を探し出し、こんな面倒くせー旅  
を終わらせてえんだ」

三蔵が最後の煙草を口にくわえる。

「でもさっ、まだ旅すら始まってねーじゃん？ 三蔵、ちょっと  
気が早すぎだよ・・・」

「フン。 猿頭でもそれぐらいの事は分かるんだな」三蔵がフツ  
と笑う。

その時、悟空は三蔵の機嫌がいいと初めて分かった。しかし、そ  
のつかの間の虫の良さもすぐに終わりを告げた。

バシャアンっ！ っと、窓ガラスが割れる。

「なっ・・・何なんだ、一体？！」悟空が割れた窓を見る。

「妖気も感じなかった・・・誰だっ、てめえらっ！！」

三蔵が窓の方に向かって叫ぶ。すると、割れたガラスの破片に誰  
かの影が映った。

「お前は・・・！」

三蔵は驚きと呆れ之余り、銃を落とした。

「うわっ！？」

悟空は三蔵が落とした銃を地面に落ちる直前で拾い、三蔵に渡し  
た。

「悟空、悪いな」

「別にいい？」

その時、影が部屋の中まで伸びてきた。外ではジャリジャリっと、  
砂を踏む音が聞こえる。

「相変わらず生臭そーな部屋だな、三蔵爺サマのお部屋はよっ！」  
声と共に、悟浄が姿を現した。

「遅えっ！ 貴様っ、俺が何時間待ってたと思っただ！ ブツ殺すぞ！！」

三蔵が声を荒げた。

「まあまあ・・・」

「八戒？！」

悟空が悟浄を押しつけ、窓から外へと出た。

「やっぱ八戒だあ〜？」

悟空が懐かしさのあまり、八戒に抱きつく。

「悟空・・・それより三蔵、遅くなってすみません。 少々イ

ザコザがあります・・・」

イザコザって・・・ただ忘れてただけじゃんね

悟浄はそう思った。

「まあいい。 それより、三仏神の命がまだ下ってないんでな。

俺達はどうもこうも、身動きがとれん。 貴様らも無駄足だったな」

三蔵が新聞を広げた。

「ホォーラ見る、八戒っ！ 三蔵はやっぱジジイだろオ?!」

悟浄が三蔵を指して言った。 どうやら八戒と『賭け』をしていたらしい。

「本当ですねえ。 悟浄、どうして分かったんですか？」

「勘ってヤツだな」

「さすがです。 でも、やっぱり賭けにはなりませんでしたね」

悟浄は彼の言葉に同意する。「結局同じ方にするもんな、俺ら」

「うるせえ!! そんな事で賭けなんざするな!!」

三蔵が八戒達に向けて陶器を投げる。

「うわっ?! 危ないじゃないですか三蔵！」

八戒が何とか受け止め、地面に置く。

「あゝあ！ マジつまんねエーの！ 大体さ、俺夕チを集めたのに三仏神は今頃何ためらってたんの？」

悟空が退屈のあまり叫ぶ。

その時、電話のプッシュ音が聞こえた。



「さっ三蔵？」

悟空が目を疑ったのは今日で何度目なのか。三蔵が自分から電話をかけたのを見たのは初めてだった。

「なんかめちゃくちゃ・・・似合わないですねえ」八戒がにっこりと笑って言う。

「うるせえ。ほっとけ」

三蔵は電話が繋がるまでの間に八戒に言った。

\*何だ、玄奘三蔵法師\*

電話の相手の第一声。

「『何だ』じゃありません。三仏神様、何時いつになったら命が下るのですか？」

三蔵はまさしく、『似合わない』口調で言った。

「ホンツト、三蔵には礼儀ってモンが似合わねーな」悟浄がボソツと言っ。

「まあきつと、心にも無い事を言ってるんでしょうけどね」はあ……と八戒はため息をつく。

「え、八戒何で分かったの？」

三蔵が『面倒くせえ』と言ったのを聞いていた悟空は驚いて尋ねる。

「?????つ!!」

三人が話していた事が三蔵には聞こえていたのだが、今は怒るに怒れない状況だったので、こみ上げてくる怒りを何とか静めた。

アイツら・・・調子に乗りやがって！ 電話を切ったら即座に殺ス！！

「げ」三人は三蔵の様子を見て言った。

「どーする?! 三蔵、絶対メチャクチャ激怒ってるって!」

「悟空・・・お前、何語喋ってんだ? 言ってる事意味分かんねーよ」

「そうですね・・・とりあえず」八戒が提案した。

「とりあえず・・・?」

二人は既に八戒を頼りにきつていた。  
三蔵に敵うのは八戒しかない事くらい百も承知、二人とも分かっていたのだ。

\*空路で天竺へ向かえ。そうすれば早く着くだろう\*  
その言葉により、三蔵ご一行様は天界にある空路を使って西へと旅立った。

「それにしても・・・何だっ、このバカ騒ぎは!!」  
三蔵は早くもキレていた。

「そうですねえ。まあ、幼稚園児の遠足だとも思えばいいんじゃないですか？」

ジープの後部座席を見て八戒が言った。後部座席には悟空と悟浄が座っている。しかし、ものすごく五月蠅い。

「何すんだよエロ河童ア!!」

「何もしてねーだろオがチビザル!!」

二人は取っ組み合いの喧嘩をしていた。

「ぜってエ嘘だっ!! さっきカードすり替えたじゃんかよ?!」

悟浄が持っていたランプがバサバサバサアッと落ち、風で飛んで行った。

「あ」

悟浄が飛んでいったランプを見送りながら言う。

「あーッ! 悟浄がランプ失くしたア!!」

悟空がさっきのお返しとでも言うつように隙なく言った。それを聞いていた八戒があははと笑う。

「トランプ、弁償してくださいね悟浄」

言っている事と表情が違う為、恐怖の微笑みとなった。

「はあ?! 何で俺が」

「ガウン!!!!!!」

三蔵の手には小銃が持たれている。

「うわっ!?! こんなトコで発砲すんなってんの!!」悟浄が叫ぶ。

「フン、知らんな。大体、貴様の日ごろの行いが良けりや当たんねーよ」

三蔵は弾を入れ変えた。カランカラン・・・走行中の時に捨てた為、火薬が無い状態になった弾丸は音を立てて落下した。

「はあ・・・それにしてもですなあ」

三仏神の中の一人が言った。

「そうですね。玄奘殿に渡したクレジットカードの銀行の講座、残高453円とは・・・」

ため息をつく。

「講座、閉めちゃおうか? まあ、そんなのはともかく・・・大変ですな」

「そうですね。彼等には重要な任務を任せましたのに、のらり

くらりと進んでますよね」

「空路から外しましょうか」

「それもそうですね」

密かに話が進んでいた。

「うるせえっ!!!」

バアンつと三蔵が発砲した。

「はっハイ!!! すぐ黙ります! 間髪入れずに黙りますう!!!」

悟空と悟浄が声をそろえて言う。

「あははー・・・」

八戒が困ったように笑ったその時、紙が大量に降ってきた。

「うげっ、何だコレ?!」悟空が叫ぶ。

「おや? 何か書いてありますよ?」

八戒がその内の一枚を掴んだ。

#### \* 玄奘三蔵殿

貴殿の旅はまことにのんびりしながら行っている。

空路を使っても遅い貴方様方ご一行は下界の道を通るべし。

長い旅になるのであるが、経験を積む事もいい事なり

三仏神\*

読み終わった三蔵は「チツ、面倒くさい事を言いやがる。良く書いてあるだけで内容は『五月蠅いから出てけ』って事だろオが」と悪態をついたという。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4785ba/>

---

最遊記～三蔵一行が地上を旅する理由～

2012年1月13日00時50分発行